

古典文法研究と古典文法教育

—動詞の活用についての実践例—

Grammar Education of Classical Japanese

小柳 智一

Tomokazu KOYANAGI

(福岡教育大学国語教育講座)

要 約

執筆者が携わる古代日本語文法の研究成果を、大学教育の場でどのように活用するかという課題について、「動詞の活用」の教育実践を踏まえた報告を行う。まず、教員養成のための文法教育は学校文法に基づいて行うべきこと、および、学校文法に対する理解の水準を上げるために歴史的背景を解説することの有効性を述べる。次に、室町時代以来の活用研究史を概説し、現在の学校古典文法の構成に見られる影響を確認する。以上を踏まえて、執筆者が実際にどのように授業をしているかを報告する。

キーワード：教員養成，学校文法，暗記，活用，助動詞

I はじめに

自分が取り組んでいる研究と、携わっている教育の間に紐帯を結ぶことは、教科専門の教員にとって重要なことである。私の専攻分野は日本語の歴史、特に古代語の文法だが、この分野の成果を教育の場でどのように活用するかを考えることは、面白い課題だと思っている。最も直接的に活かせるのは古典文法で、ここに報告するのも、古典文法教育の実践例である。ただし、実践報告だけでなく、実践を支える研究成果も紹介する。その方が、研究と教育の具体的な結びつきを理解してもらいやすいだろうと思うからである。

報告する実践の場は、本学や他大学での授業が中心だが、それとは別に、2007年度前期に行った古典文法の勉強会を特記しておきたい。勉強会の参加者は、本学中等教育教員養成課程国語専攻3年生を中心とする10数人で、週に1回(90分)開いた。この勉強会では、次の本を教材として使用した。

中村幸弘(1993)『先生のための古典文法Q&A100』
右文書院

この本は、同じ著者が先に公刊した、高校生用の『生徒のための古典読解文法』の指導資料を母胎として著されたもので(同書「はしがき」)、高等学校の教師から寄せられた質問に答える形で、基礎的な知識から発展的な内容まで100の事項が解説されている。本の後半にはその『生徒のための古典読解文法』が収録

されているが、この文法書は一般的な内容や構成でありながら、類書にくらべて精選されており、現在の学校古典文法の水準を知るのに便利である。このような理由から教材として選んだ。

勉強会では、参加学生が所定の範囲を予習して来て疑問や意見を出し合い、その後で私が補足説明をする形式で進めた。学生は、既習の内容の復習に加え、多くの新しい知識に接することにとまどいも感じたようだが、学ぶ側と教える側の両方の立場から疑問・意見を提示し、よく議論していた。

このような場での実践に基づいて報告を行う。取り上げる内容は、古典文法の最初の段階で学習し、すべての土台となる「動詞の活用」である。

II 教員養成のための文法教育—学校文法—

ところで、本論に入る前に、教員養成を目的として大学で文法教育を行う際の、私の基本的な方針を述べておきたい。教員を養成する場合には、いわゆる「学校文法」に基づいて教育すべきだと考える。

学校文法とは、現在の学校教育で採られている文法理論の通称で、「文節」を基本単位とするところに特徴がある。学校文法は、それなりの説明能力の高さと明快さがある一方で、欠陥も多く指摘されている。それを克服する別の文法理論も提案されてはいるが、学校文法を廃止する趨勢はなく、文法理論の抜本的な変更は現実的でない。高等学校までの教育で行われる文法理論が学校文法である以上、大学で教員養成のために

行う文法教育も、学校文法に基づいて行うべきだと考えるのである。

しかし、学校文法は上述のように十全でなく、また、高等学校までの内容をくり返すだけでは、大学で文法教育を行う意義はほとんどない。大学で行うからには、習得済みの知識に奥行きを与え、学校文法の欠陥を認識し、理解の水準を上げるものでなければならない。それには大きく2つの方策が考えられるだろう。

- ①学校文法とは別の文法理論を紹介し、学校文法の相対化を図らせる。
- ②学校文法の背景を解説し、学校文法の仕組みを理解させる。

①の方策は、他の文法理論との比較を通して、学校文法の特徴を認識させることができ、②の方策は、なぜそのようになっているかという学校文法の由来と仕組みを理解させることができる。①が学校文法を外側から眺めるのに対し、②は内側から眺めると言え、2つは対照的な方策である。それぞれに有効性があるが、少ない授業時間の中で、学生に混乱を与えずに学校文法と別の文法理論の両方を解説するのは難しいと感じるので、私は主に②の方策を採っている。

それでは、②の「学校文法の背景」とは、具体的に何を解説すればよいだろうか。これも2つのことが挙げられると思う。

- ③学校文法の理論構造そのもの
- ④学校文法の形成史

③は、どのような事実を前提として、どのような原則を立て、さらにそこからどのようなことが帰結するか、という体系内部の論理的筋道で、④は、学校文法がどのような過程を経て形作られてきたか、という歴史的筋道である。ただし、この2つは別のことではない。学校文法の形成過程を知ることが、学校文法の内部理論を理解することにつながるからである。どの分野でも、在るものをそのまま受け止めるだけでなく、そのように在ることの仕組みを知ることが、理解を深める。仕組みを理解すれば、すべての知識が平板には並ばず、重要度に差があることを理解し、知識群を立体的に構築する契機になるだろう。これが、知識に奥行きを与えるということである。

このような教育は、言うまでもなく、ある文法書を始めから終わりまで暗記させる教育と異なる。おそらく多くの学生にとって、高等学校の教育は、学校古典文法を所与として暗記させられるものだったのであろう。しかし、大学では、なぜそう考えるのかという根拠に重点を置いて行うべきである。以上の方針に従って、文法についての授業を行っている。なお、文法教育を多角的に検討したものとして、矢澤(2003-2005)が

参考になることを言い添える。

さて、次節から本論に入る。Ⅲで、学校古典文法の土台となった研究史を概説し、Ⅳで、学校古典文法の「活用」に関する部分の構成を確認し、それらを踏まえて、Ⅴ以下で実際の授業内容を報告する。

Ⅲ 活用研究史概説

まず、活用の研究史を簡単に述べる。活用研究は、室町時代に萌芽が見られ、明治時代に学校古典文法で採られた活用表が完成する。この歴史は、4つの段階に分けて捉えるとわかりやすい。

第1の段階は江戸時代前期以前で、後の本格的な活用研究に影響を与えた2つの研究である。1つは、室町時代に歌学の世界で行われた係り結びの研究で、例えば次のような文言がある。

- 1 「こそ」は「えけせて」の通音
 - 2 「ぞ」は「うくすつぬ」の通音
- 〈手爾葉大概抄：1483年以前成〉

これは、文中に「こそ」がある時は文末の語形がエ段に、「ぞ」がある時はウ段になることを指摘している（「花こそ咲け。」「花ぞ咲く。」のように）。もう1つは、江戸時代前期、五十音図と動詞の語形変化を重ね合わせた研究である。例えば「ゆく《行く》」の語形変化を次のように示したものがある。

- 3 ゆかん ゆき ゆく ゆけ ゆこ
- 〈賀茂真淵『語意考』：1769年序〉

これは、各語形末の母音に注目し、五十音図の段順（あいうえお）に配列してある。後に「活用」と呼ばれる語形変化の現象に気づいている。

第2の段階は江戸時代後期で、本格的な研究が開始された。まず、係り結びの研究を受け、文末に現れる語形が、通常の文末の語形、「ぞ」などの結びとなる語形、「こそ」の結びとなる語形の3種に分けて網羅された。これは、現在「終止形」「連体形」「已然形」と呼ぶ活用形の活用語尾である。例えば、4はサ行下二段、5はカ行四段である（5に「く」が1つしかないのは、四段は終止形と連体形が同形であるため）。

- 4 す する すれ
 - 5 く け
- 〈てにをは紐鏡：1771年刊〉

次に、文中の語形まで対象を広げ、すべての語形を集めた一覧が作成された。6に示すのは、5と同じくカ行四段だが、現在の「未然形」「連用形」の活用語尾に当たるカとキが加えられている。

6 カ キ ク ケ 〈活用言の冊子：1782年頃成〉

これをカ行四段，サ行四段，タ行四段，……，カ行下二段，サ行下二段，タ行下二段，……，というように列挙し，それぞれに所属する動詞を大規模に収集した。第1の段階から飛躍的に進んでいる。

第3の段階は，第2段階の研究を発展させ，活用形の整理，活用の種類の整理，の順に進め，本質的な部分はほぼ完成の域に達した。最初に示された活用形は，次のようなものである。（ ）内に現在の活用形の名称を注記する。

- 7 第一等（終止形）
- 第二等（連体形）
- 第三等（一般の終止形とラ変の連体形）
- 第四等（連用形）
- 第五等（已然形）
- 第六等（命令形）
- 第七・八等（未然形）

〈活語断続譜：1803年頃成〉

また，活用の種類は次の通りである。（ ）内は現在の活用の種類の名称。

- 8 四段の活（四段）
- 一段の活（上二段）
- 中二段の活（上二段）
- 下二段の活（下二段） 〈詞八衢：1808年刊〉

活用の種類の名称は，現在も基本的に8を踏襲しているが，活用形の名称は7から変更された9を下地としている。

- 9 将然言（未然形）
- 連用言（連用形）
- 截断言（終止形）
- 連体言（連体形）
- 已然言（已然形）
- 希求言（命令形） 〈和語説略図：1833年刊〉

この段階に至って，活用形の種類を縦に，活用の種類を横に配置した1枚の「活用表」として2次元的に表示された。学校文法もこれを継承している。

第4の段階は，江戸時代末から明治時代にかけての微修正の時期で，名称の変更や追加がなされた。こうして形成された活用表は，昭和初期の教科書に取り入れられて以後，学校古典文法の標準となる。述べてきたことをまとめると，次の通り。

- 10 第1段階 活用の発見 五十音図に依拠
- 第2段階 活用語尾の収集・分類

第3段階 活用形・活用の種類の整備 活用表

第4段階 微修正

活用表が五十音図に依拠して作られたことは，至る所に影響している。活用の種類が「四段」「上二段」のように段（母音）の種類によって命名されていることや，現在の文法教育で動詞の行（子音）を確認する習慣（『向く』は何行ですか？）があるのも，その例である。また，活用形の配列が，未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形の順であるのも，五十音図に依拠したためである。活用形をこの順番で並べると，四段動詞が先掲3・6のように，五十音図の段順になるのである。これを試しに，終止形・連体形・已然形・命令形・連用形・未然形の順に並べると，「クケキカ」となり，五十音図の段順でない。

活用表で活用の種類として最初に挙げられるのが四段であるのは，四段が活用の代表という印象を持たれたからだが，なぜ代表なのかと言えば，母音が五十音図の段に広く渡ってきれいに現れるからである（上二段はi u，下二段はu e，上二段はi，下二段はeの母音しか現れない），ここにも五十音図に依拠した影響が認められる。

このようにして，学校古典文法の活用表は作られた。さらに，これを基にして最小限の修正を加えたのが，学校口語文法の活用表である。そのため，口語文法の活用表を見ると，無駄や不自然さが目に付く。生徒は，中学校で口語文法，高等学校で古典文法を学習すると，すでに2つの学習を済ませた大学生以上の立場からすると，古典文法の仕組みを理解した上で，口語文法を見直した方がわかりやすい場合がある。このことを考慮して，授業では，口語文法よりも古典文法に重きを置いている。

IV 学校古典文法の「活用」についての構成

次に，動詞の活用に関する内容が，学校古典文法でどのように構成されているかを確認する。中村『生徒のための古典読解文法』の目次から，該当箇所を抜粋する。この構成は一般的である。

11 第一章 古典文法入門

【六】単語

- [1] 自立語と付属語
- [2] 活用する語と活用しない語
- [3] 品詞と品詞分類表
- [4] 接頭語と接尾語

第二章 動詞・形容詞・形容動詞一用言一

【一】用言

【二】動詞

- [1] 活用形とその用法
- [2] 活用の種類

- [3] 四段活用
- [4] ナ行変格活用
- [5] ラ行変格活用
- [6] 下一段活用
- [7] 下二段活用
- [8] 上一段活用
- [9] 上二段活用
- [10] カ行変格活用
- [11] サ行変格活用 (下線は引用者)

下線部を見ると、まず、品詞分類の話で活用が登場し、次いで動詞の話で活用形と活用の種類が登場している。注目されるのは、活用・活用形・活用の種類というこの順番が、10にまとめた研究史で発見・整理された順番と一致することである。歴史的な順番が論理的な説明の順番と同じでなければならないわけではないが、気づきやすいことから気づくのが普通だから、それがわかりやすさの順番でもある。

つまり、学校古典文法の活用に関する部分は、研究史を反映しているのであり、この順番で説かれることには理由がある。したがって、Ⅲで解説した内容を知ることが、学校古典文法の知識を深めることになり、国語科教員が知っておいてよい知識だろう(本学の2005年度前期の講義では集中的に取り上げた)。

V 活用について

それでは、授業で実践した内容を報告する。Ⅳで見たように、活用に関する内容は、活用・活用形・活用の種類の順で説明するのがよいと考えられ、実際に授業ではそうしている。しかし、本稿では、活用形の話だけを別の方向へ発展させた実践についても報告したいので、活用・活用の種類・活用形の順で進める。なお、授業で使用した配付資料を抜粋して示す。

まず、活用について。最初に行うのは、日本語の活用の本質を解説することである。配付資料に12のように示し、それを印象づけるために13の例を挙げる。

12 活用…ある語が意味内容を変えずに、文が終わることや、他の語に続くことなどの文法的機能に応じて語形を変化させること。

13 a うごかず うごけば うごきて
…《動く》意は変わらない→活用

b えがかず うずけば
…《動く》意ではない →活用ではない
(配付資料)

そして、ここで言う「活用」が、英文法で言う「活用」(go went gone や I my me など)と性質の異なることを強調する。同じ用語が学校国文法と学校英文法で違うことを指すのは問題だが、現状では2つの相違

を意識させるのが精々だろう。

次に、活用した1つ1つの語形、つまり活用形を見ると、例えば13 a で言えば、「うご」のように変化しない部分と、「か」「け」「き」のように変化する部分があり、前者を「語幹」、後者を「活用語尾」と呼ぶことを確認する。

14 語幹…活用しても変化しない部分。

15 活用語尾…活用すると変化する部分。

(配付資料)

なぜ活用形には語幹と活用語尾があるのか。これを理解させるために、次の問いを考えさせる。— 次の16 a・b (これは板書) は、→の前の形が後の形に変化したとする。2つが同じものの変形であることがわかりやすいのは、aとbのどちらだろうか？

16 a ○○ → ◆◆

b □▲ → □▼

全体が○○から◆◆へ変化してしまう16 a よりも、□が変化せずに残る16 bの方が、同じものであることがわかりやすい。変化しない□が同一性を明示するからである。これをモデルとして、次の17のように並べて板書し、語幹と活用語尾の働きを考えさせる。

17 a □+▲ → □+▼

b うご+く → うご+け

要するに、語幹は各活用形に共通する意味内容を、活用語尾は文法的機能の違いを表すので、2つの部分が必要なのである。これを理解させた上で12に戻り、意味の同一性(「ある語が意味内容を変えずに」と、文法機能に対応した語形変化(「文法的機能に応じて語形を変化させる」という2点が活用のポイントであることを確認させる。これを押さえていない学生は意外に多い。

語幹と活用語尾に関しては、まだ問題がある。多くの動詞は、例えば「はしる《走る》」のように語幹と活用語尾が簡単に分解できる。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
はしら	はしり	はしる	はしる	はしれ	はしれ

語幹	活用語尾					
	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
はし	ら	り	る	る	れ	れ

(配付資料)

ただし、学校古典文法は、上一段・カ変・サ変と、下二段のうち「う《得》」「ぬ《寝》」「ふ《経》」には語幹と活用語尾の区別がないとしている。しかし、これ

は不自然で、学校古典文法の欠陥の1つである。この不自然さは、学校古典文法が次の条件に固執するせいで起こっている。

⑤活用語尾はなければならない

この条件に固執するのは、10にまとめた研究史が影響している。活用研究は、第2段階以降、活用語尾によって分類して来たので、活用語尾がないと分類ができないのである。そのため、学校古典文法にとって、活用語尾は必須である。

上一段・カ変・サ変・下二段「う」「ぬ」「ふ」を語幹と活用語尾に分けると、次のA～Cの可能性はある。具体例として上一段「みる《見る》」を使う。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
み	み	みる	みる	みれ	みよ



A

語幹	活用語尾					
	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	み	○	○	る	る	れ

B

語幹	活用語尾					
	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	○	み	み	みる	みる	みれ

C

語幹	活用語尾					
	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
	(み)	み	み	みる	みる	みれ

〈配布資料〉

まずAは、「活用しても変化しない部分」を語幹とする14の定義に従って、「み」を語幹に上げた。すると、未然形・連用形の活用語尾がなくなり、⑤に反する。よって、これは不採用。次にBは、未然形・連用形の活用語尾を作るために「み」を下ろした。しかし、これは、不変化部分「み」があるのにそれを語幹としないので、14の定義に反する。よって、これも不採用。そこで、折衷案として考えたのがCである。「み」は語幹でもあり活用語尾でもある、つまり語幹と活用語尾の区別がないという見方である。これが学校古典文法の処理だが、曖昧で不自然さをまぬがれないことは認識しておいた方がよい。

なお、語幹と活用語尾の区別のない動詞（上一段・カ変・サ変・下二段「う」「ぬ」「ふ」）はよく暗記させられるが、無駄である。この処理がされる動詞は、上の説明から明かなように、未然形・連用形が1音節になる動詞に限られ（「はしる」のように2音節以上あれば、語幹と活用語尾はきれいに分かれる）、このことさえ理解していれば暗記する必要はない。

ここに述べた問題は、一般の文法書や指導書には書いていないが、学校古典文法の活用の仕組みを理解す

る上で必要なことであり、授業では説明している。

VI 活用の種類について

次に、活用の種類について。活用の種類は、大きく2つに分けられる。

18 正格活用…規則的な活用。所属語数が多い。活用語尾に現れる母音の種類(段)によって命名。四段・上二段・下二段・上一段・下一段活用がある。

19 変格活用…不規則的な活用。所属語数が少ない。活用語尾に現れる子音の種類(行)によって命名。ラ行・ナ行・カ行・サ行変格活用がある。

〈配布資料〉

この2つの違いは「規則/不規則」「所属語数が多い/少ない」「母音(段)の種類/子音(行)の種類によって命名」を対比して説明すると、理解させやすいと思う。規則的で数の多いのが「正格」で、それから外れるのが「変格」である。2つは平等に並ぶのではなく、正格あつての変格である。

正格活用は、活用語尾に現れる母音の種類によって分類するのだが、それを視覚的に示す工夫として、次のような表を示す。

	a	i	u	e	o
未然形	◇	○	△		
連用形		○	△	▲	●
終止形		○	△	▲	●
連体形		○	△	▲	●
已然形		○	△	▲	●
命令形		○	△	▲	●

〈配布資料〉

実際の配布資料には◇○△▲●の印しがなく、印を結ぶ線は学生に引かせる。この表を使って、次のことを確認する。

- 20 ◇…a i u e の4種類 →四段
- …上の方の i 1種類 →上一段
- △…上の方の i u の2種類 →上二段
- ▲…下の方の u e の2種類 →下二段
- …下の方の e 1種類 →下一段

この表は、uの所で折り曲げると(想像させる)○と●、△と▲が重なり合い、上段と下段が対称的であること、また、◇だけが孤立していること、を理解させるのにも便利である。この、四段と一二段の対立は、古典語の動詞の活用の本質である。

正格活用の種類の見分け方は、上一段・下一段は所属語を暗記しておき、四段・上二段・下二段は未然形

の活用語尾に現れる母音で判断する、というのが一般的な方法である。しかし、本当に上一段と下一段を暗記する必要があるのだろうか。

まず、下一段は「蹴る」1語なので、暗記させても悪くないが、次のことは知っておくべきだろう。「蹴る」は用例が稀少で、学生がこの語に出くわす確率は非常に低い。三浦(1974)の調査によると、竹取物語・伊勢物語・土左日記・大和物語・宇津保物語・かげろふ日記・枕草子・和泉式部日記・紫式部日記・源氏物語・更級日記には例がなく、落窪物語に4例、大鏡に1例、宇治拾遺物語に11例、平家物語に9例、徒然草に2例しかない。さらに、理由は省くが、「蹴る」が平安時代(古典文法が対象とする時代)に下一段だったというのは疑わしい。授業では、学校古典文法に則って下一段を挙げるが、このことを説明している。私個人は下一段を教える必要性を感じない。

次に、上一段として暗記させられる単語は、大体「着る」「似る」「煮る」「干る」「見る」「射る」「鑄る」「居る」「率る」だが、暗記しないで済むならその方がよい。母音の種類で判断すると、上一段は上二段と同じく*i*の母音が現れ、2つの見分けがつかない。しかし、実は決定的な違いがある。中山(1993)の指摘するように、2つは未然形の音節数が異なるのである。

- 21 a 見ず…未然形が1音節 →上一段
b 起きず…未然形が2音節以上→上二段

上一段は1音節(「みる」を後部に持つ複合語「かへりみる」「こころみる」などは当然ながら別)、上二段は2音節以上になり、このことを知っていれば、簡単にテストができ、暗記の必要はない。

したがって、正格活用は、未然形の活用語尾に現れる母音によって、*a*なら四段、*e*なら下二段、*i*の時は、未然形が1音節なら上一段、2音節以上なら上二段、と見分けられる。下一段は「蹴る」1語を覚えれば済むが、覚えなくてもほとんど支障はない。

一方の変格活用は、例外的なものだから、所属語を暗記する必要がある。次の4種類である。

- 22 ラ変=有り 居り 侍り いまそがり
ナ変=死ぬ 往ぬ
カ変=来
サ変=為 (配布資料)

ラ変は「存在」、ナ変は「消失」、カ変は「到来」、サ変は「(抽象的な)動作」を意味する動詞で、存在と動作、消失と到来が対をなして、すべての動詞が表す意味の中で最も基本的である。基本的であるから使用頻度も高く、そのために、圧倒的多数の正格活用に取り込まれず、例外的な活用が保たれている。これが変格活用動詞の特徴である。

以上のまとめとして、次の活用表を掲げる。

活用の種類	例語	行	語幹	活用語尾						
				未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	
正格活用	四段	走る	ラ	走	ら	り	る	る	れ	れ
	上二段	起く	カ	起	き	き	く	く	くれ	きヨ
	下二段	捨つ	タ	捨	て	て	つ	つ	つれ	てヨ
	上一段	見る	マ	(見)	み	み	みる	みる	みれ	みヨ
	下一段	蹴る	カ	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けヨ
変格活用	ラ変	有り	ラ	有	ら	り	り	る	れ	れ
	ナ変	死ぬ	ナ	死	な	に	ぬ	ぬ	ぬれ	ね
	カ変	来	カ	(来)	こ	き	く	く	くれ	こ
	サ変	為	サ	(為)	せ	し	す	す	すれ	せヨ

(配布資料)

この表についていくつか注記すると、まず、活用語尾の欄で、活用の種類を決めるのに関与しない部分は片仮名で示してある。また、語幹の欄で、()は不変化部分があるのに語幹と活用語尾の区別がないと処理されているもの(Vを参照)、< >は仮名で見ると不変化部分がなくて語幹と活用語尾の区別がないもの(ローマ字で見ればカ変はk、サ変はsが語幹)を示す。なお、下一段も載せてある。

VII 活用形について一助動詞へー

最後に、活用形について。活用形は名称の意味を1つ1つ確認することが重要である。

- 23 未然形…動作が未だ実現していないことを意味する形
24 連用形…用言に続くこと(連用修飾法)を主な文法的機能とする形
25 終止形…切れて終止すること(終止法)を主な文法的機能とする形
26 連体形…体言に続くこと(連体修飾法)を主な文法的機能とする形
27 已然形…動作が已に実現していることを意味する形
28 命令形…動作の命令を意味する形 (配布資料)

ただし、名称は、その活用形の主な意味・文法機能によって付けられており、名称の表す内容がその活用形のすべてでないことを強調する。例えば、連用形は、次の29aの連用修飾法以外に、29bの助動詞を接続させる用法もある。

- 29 a 急ぎ行く 忍び泣く [連用修飾法]
b 咲きぬ [完了] 会ひき [過去]
整へたり [存続] (配布資料)

このことは、文法書にも1つの活用形に複数の用法が挙げられているから、理解していて当然だが、十分

でない学生もいる。具体例を示し、これだけある用法の中からこの用法を代表としてこの名称が付いた、と順を追って説明するのがよいと思う。

ところで、文法書は一般に、動詞・形容詞・形容動詞の話（主たる内容は活用に関する事柄である）が終わると、助動詞の話に移る。先掲の中村『生徒のための古典読解文法』も第二章「動詞・形容詞・形容動詞一用言一」に続く第三章は「助動詞」である。今述べている活用形の話は、工夫次第で、助動詞の話へ発展させることができる。

普通、古典語の助動詞として挙げられるのは、次の28語である。

- 30 a む むず ず じ まし まほし
 き けり ぬ つ たり (存続) けむ
 べし まじ らむ なり (推定伝聞) めり
 b る らる す さす しむ り
 c なり (断定) たり (断定) ごとし
 d らし たし (配布資料)

しかし、この中には「古典語の助動詞」でないものが混ざっている。理由はそれぞれだが、30 b・cは接尾語と見るのがよく、助動詞からは除くべきである。30 dの「らし」は奈良時代、「たし」は鎌倉時代以降の語なので、古典文法の主対象である平安時代の語ではなく、やはり除外すべきである（このように時代差をあまり考慮しないのも、学校古典文法の不都合な点である）。したがって、結局、古典語の助動詞と呼べるものは、30 aの17語である。

古典文法教育では普通、1つ1つの助動詞ごとに意味・活用の型・接続を暗記させる。しかし、30 aに挙げた真に助動詞らしい助動詞は、3つのグループに分かれ、グループごとに意味と接続の対応することが知られている（小柳2004）。古典語の助動詞論の研究成果を交えて、次のように解説した。

ある事態が在る時、その事態は必ず何らかの在り方を有して在る（小柳2005）。例えば「開花」という事態で言えば、今現に咲いているという在り方、まだ咲いていないがこれから咲くという在り方、今も今後も咲くことはないという在り方、など。この事態の在り方のことを「様相」と呼び、様々な様相の根本は、すでに起こっていることをいう「既実現」と、いまだ起こっていないことをいう「未実現」の対立である。30 aの助動詞は様相を表す。

まず確認すべきことは、助動詞が接続する活用形は、未然形・連用形・終止形で、連体形・已然形・命令形には接続しないということである。未然形に接続する助動詞は30 aの1列目の6語で、代表的な意味は次の通りである。

- 31 む・むず (推量・意志) ず (打消)

- じ (打消推量・打消意志) まし (反実仮想)
 まほし (願望) (配布資料)

これらの助動詞の表す意味は、すべて未実現である。未然形は、23に示したように「動作が未だ実現していないことを意味する形」だが、これは、未実現を表す助動詞を接続させることによる。

連用形に接続する助動詞は30 aの2列目の6語で、代表的な意味は次の通りである。

- 32 き・けり (過去) ぬ・つ (完了)
 たり (存続) けむ (過去推量) (配布資料)

これらの助動詞は、未然形の場合と反対に、既実現の様相を表すという共通性がある。連用形という名称には、既実現を表す助動詞を接続させることは反映していないが、動詞の連用形にとっては連用修飾法よりも、はるかに重要な用法である。

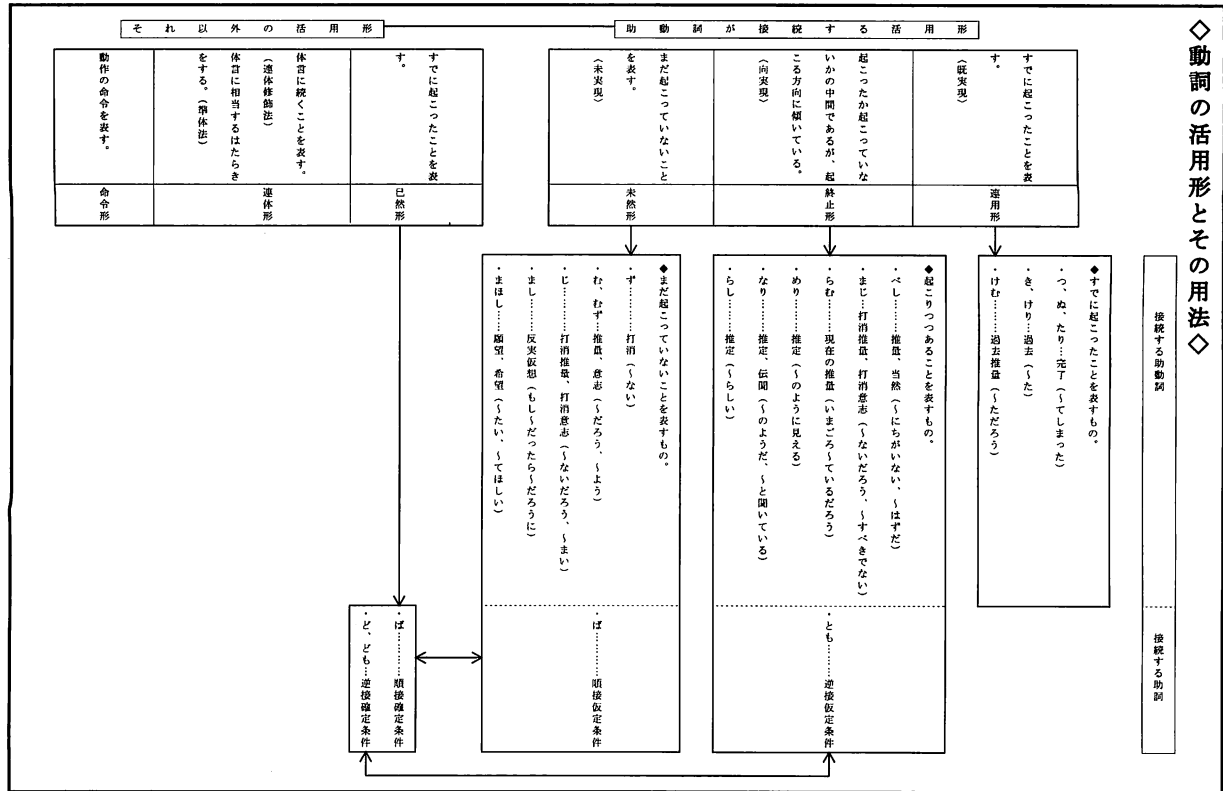
終止形に接続する助動詞は30 aの3列目の5語で、次がその代表的な意味である。

- 33 べし (推定) まじ (打消推定)
 らむ (現在推量)
 なり (推定伝聞…原義は聴覚的把握)
 めり (目前推量…原義は視覚的把握)
 (配布資料)

これらは、未実現か既実現かをはっきり確定しない点で共通している。ただし、2つに分かれる。1つは「べし」「まじ」「らむ」で、未実現と既実現の中間にあつて、実現しているとはいにくいがほぼ実現に傾いている「向実現」の様相を表す。もう1つは「なり」「めり」で、事態を知覚的に捉えたことを表し、「私にはこう聞こえる・見える、実際はどうか確証が持たないが」という曖昧さを伴いがちなものである。

このように、未実現を表すグループと未然形、既実現を表すグループと連用形、どちらとも言えないグループと終止形、という対応が認められる。このことを知っていれば、助動詞の意味と接続を1つ1つ暗記せず、グループごとに整然と覚えられる。記憶の負担が軽減されることは明らかだろう。活用形の話は工夫すれば、このように助動詞の話へ円滑に発展させることができる。学生の感想も、この方が覚えやすいということだった。

本稿冒頭に記した勉強会で、以上の解説をしたところ、参加学生が話し合い、次頁に掲げる図表を作成した。まだ十分とは言えないが、1つの成果として報告する。



VIII おわりに

日本語の歴史に関する研究成果を、大学での古典文法教育にどのように活かすかという課題について、実践例を踏まえて報告を行った。

大学の教員が新鮮で活発な教育を続けるためには、自分の専攻分野の研究成果を弛まず蓄積し続けることが重要である。新たな学術的知見の中には、新たな教育の糸口が含まれていると思うからである。ただし、その糸口は漫然と眺めていても見えず、それを見出す目を養うことに心を砕かなければならない。その目は、日々の授業や指導の中でこそ涵養されるものだろう。

研究と教育の間に紐帯を結ぶことが重要である。自身が学ばない者は、他人に学べと言うことはできない——これは教師の良心だろう。

参考文献

小柳智一（2004）「ベシ・ラシ・ラムの接続について」『国学院雑誌』105- 2

小柳智一（2005）「副詞と否定—中古の「必ず」—」『福岡教育大学国語科研究論集』46

中山昌久（1993）「動詞活用形における成層性など」『国文学解釈と鑑賞』58-1・58-7, 学燈社

三浦和雄（1974）『文語文法用例と論考』明治書院

矢澤真人（2003-2005）『日本の文法教育』I - III（平成14-16年度科学研究費基盤研究C（研究代表者：矢澤真人）「日本語教科教育文法の改善に関する基礎的研究」報告書